

【三陰三陽の考え方 3 お腹の調子がもう一つ 陽明病と太陰病】

病が長びくと消化管に病が進行します。この病態を陽明病と名づけます。「胃家（いか）実、是ナリ」といわれるように、便秘、腹満、鼓腸、決まった時間に熱が出るなどの症候です。はしかの発疹期などは陽明病期にあたります。消化管、つまり漢方的には裏（り）に熱がある病態ですから大・小承気湯（じょうきとう）や桃核承気湯（とうかくじょうきとう）をお出しします。いずれも大黄を主薬にした緩下剤ですが、漢方における大黄は、「結実（けつじつ）ヲ治ス」といわれるように抗炎症作用をもつ薬方です。糖尿病などで口渴が強い場合も陽明病と考えますが、このときは「熱を冷ます」という発想で、石膏（せつこう）を主薬とする白虎湯（びやっこう）をお出しします。

これに対し、消化管に寒（かん）のある病態は太陰病と名づけられ、自覚症状は陽明病と似てますが、脈状は微、細で、同じお腹が張った状態でも、陽明病の実満（便がたまった状態）と異なり虚満（ガスがたまった状態）です。従って、強い下剤を使うことは控え、大・小建中湯（けんちゅうとう 中は胃腸のことです）、桂枝加芍薬湯（けいしかしゃくやくとう）などの薬方を与えます。いずれも腸管の調整作用が主になります。